

心理学 ミュージアム



立命館大学立命館グローバルイノベーション機構 客員研究員

鈴木祐子

Profile — すずき ゆうこ

1997年、日本大学大学院文学研究科博士後期課程満期退学。
東北女子短期大学、九州大学ユーザーサイエンス機構等
を経て現在に至る。専門は日本の心理学史。

(独) 農業・食品産業技術総合研究機構食品総合研究所 特別研究員

増田知尋

2005年、日本大学大学院文学研究科修了。博士(心理学)。
立教大学アミューズメント・リサーチセンター プロジェクト
研究員を経て、2008年より現職。専門は知覚心理学。

立教大学現代心理学部教授

長田佳久

1975年、名古屋大学文学研究科修士課程修了(心理学専攻)。
立教大学文学部助手、助教授、教授を経て、2006年より現職。
専門は実験心理学(知覚、比較認知)。

この人はだれ？ なにをしている？



慶應義塾大学福澤研究センター所蔵資料「ウェーランド講述の図」より、一部抜粋して転載。

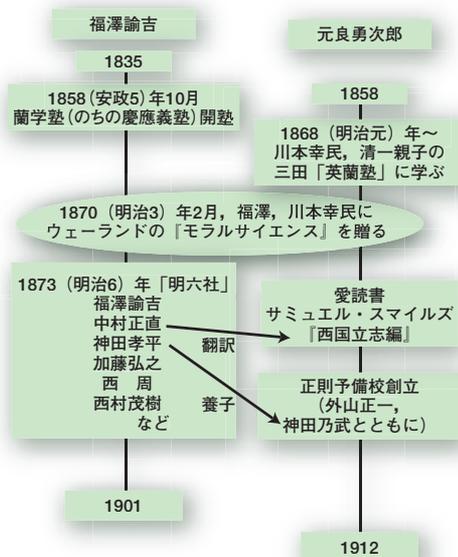
この日本画を目にしたことがある人はもしかしたら多いかもしれません。中心に座るのは慶應義塾創始者の福澤諭吉（1835-1901）です。背景に煙があがっています。幕府軍と新政府軍が衝突した上野戦争（彰義隊の戦い）です。この絵は、喧噪のなかにあっても、学問を優先した福澤の姿を描いたものです。このとき福澤が講じていたのが、ウェーランド（Francis Wayland）の『経済学』（*The Elements of Political Economy*）でした¹。

ウェーランドはアメリカの学者で、ロードアイランド州にあるブラウン大学学長を務めた人物です。『経済学』や『モラルサイエンス』の著者として、明治初期、非常によく知られていました。特に『モラルサイエンス』は福澤の『学問ノススメ』のタネ本として知られています。そして、有名ではないのですが、ウェーランドには“*The Elements of Intellectual Philosophy*”という、タイトルから心理学を連想させるような著作もあります。

幕末から明治初期は、経済学や道徳哲学の知識と相混じって、心理学的知識が漠然として存在した時代です。そしてこの時代は日本初の心理学者とされる元良勇次郎（1858-1912）の幼少期にあたります。三田藩（現在の兵庫県三田市）の士族に生まれた元良は、幼少期に英蘭塾という私塾で西洋の知識に触れました。英蘭塾の当時の記録には、「杉田勇二郎（杉田は元良の旧姓）が明治元年5月10日に入門した」とあります²。この私塾は、同じく三田藩出身で幕末期の有名な化学者、川本幸民（1810-1871）が晩年に開いたものでした。

三田藩と福澤諭吉との接点は深く、福澤が三田藩当主の九鬼隆義に送った書簡がいくつもあります。そのなかに、福澤が「明治3年2月、川本幸民にウェーランドのモラルサイエンスを贈った」旨が記されたものがあります。明治3年は川本の亡くなる前年にあたります。

福澤と元良をつなぐ接点を簡単に図にまとめました。上記のように、ウェーランドの著作を通じた縁のほかに、たとえば、元良が同志社の学生時代に愛読したといわれるサミュエル・スマイルズの“*Self-Help*”は、『西国立志編』として、福澤と同じく明六社（日本最初の学術団体）の一員であった中村正直の翻訳で、『学問ノススメ』と同様に、明治の大ベストセラーとなりました。また、元良は、明治22年、やはり明六社員であった神田孝平の養子である神田乃武、そして外山正一とともに、正則予備校（現在の正則高等学校）を創立、教育活動にもあたりました。



そのほか、福澤諭吉の先生である緒方洪庵（1810-1863）は川本幸民とはほぼ同時期の蘭学の実力者であり、洪庵と幸民には交流がありました。また、九鬼家の一人、九鬼隆一はやはり幸民の門下生であり、慶應義塾で福澤に学び、後に文部省のトップとなった人物です。文部省には、『心学講義』で知られる西村茂樹や川本幸民の息子・川本清一もいました。西村もまた明六社員でした。

心理学の形成過程の背景と当時の知的雰囲気留意すると、新たな発見につながってきます。日本の心理学の形成は欧米の心理学知識として導入されたものがそのまま定着しただけではなく、現代的な視点から見るとちょっと意外に思われる分野からも思想が入り込んできたという事実をぜひ、知ってほしいと思います。

1 「ウェーランド講述の図」は、慶應義塾に依頼された安田靉彦によって、明治43年頃に描かれた。
 2 小沢清躬『蘭学者川本幸民伝』（1948、川本幸民顕彰会）による。